

日本創生委員会 <第12回 会議骨子>

議事次第

2009年10月1日(木) 11:30~13:30

於：ホテルニューオータニ ガーデンタワー宴会棟 鳳凰の間 ※出席者は別添資料:「委員名簿」ご参照

- 三村会長挨拶
- 政策小委員会「Women's Table」報告
- ゲストスピーチ&質疑応答
 - ・ 「我が国のビジョン」 元内閣総理大臣 中曾根 康弘 様
 - ・ 「我が国の政治について」 東京大学先端科学技術研究センター 御厨 貴 様
- 寺島委員長総括

< 会長挨拶 >

- ・ 今回の選挙は、「マニフェスト選挙」というのが非常に大きな特徴であった。
- ・ マニフェスト選挙には、たくさんのいいこともあったが、日本の将来をどうするのかというビジョンはが必ずしも明確でなかったのではないかと。
- ・ しかし、ビジョンというものは誰かから与えられるものではなく、我々自身が必死になってこれを考え、いろいろ提案するなかで、日本の将来像がカタチづくられていくのではないだろうかと思う。
- ・ 中曾根先生のご講演は、我々のいまのような問題意識に対して大きな示唆を与えていただけたと思うので、本日も活発な議論を期待したい。

< 政策小委員会 「Women's Table」報告 >

- ・ Women's Tableの設置目的は、日本創生委員会での検討テーマについて事前討議を行い、ある程度の完成度までまとめたうえで本委員会に提案すること。
- ・ W-Table委員長は、日本創生委員会委員で前横浜市副市長の野田由美子氏。
- ・ メンバーは、日本創生委員会参加企業をベースに、民間企業から10名、現役大学生5名、オブザーバー委員として霞が関の8つの省から16名の、合計32名。最終的には40名ほどになる予定。
- ・ W-Tableの特徴は、メンバーが、女性のみ、かつ若い世代が中心であること。年齢構成は、21才から38才まで、平均年齢は29才。
- ・ 現在までの活動状況は、8月19日にキックオフを行い、第2回の会議まで開催。本会議とは別に、有志小グループごとの勉強会も数回実施。
- ・ W-Tableでは、最初の課題として、国家ビジョンについて議論・検討を行う。
- ・ 日本創生委員会への提案時期は、早ければ年明けの本委員会にて中間とりまとめを報告予定。

< ゲストスピーチ（中曽根康弘元内閣総理大臣） >

- ・ 本日は、現在の政治的課題、最近の色々な政治的变化に対して私が直感的に感じていることを簡単に申し上げてみたい。
- ・ 鳩山政治は、いわゆる55年体制を大転換しよう、諸政一新をやろう、という意気込みで、官僚政治打破、民衆政治の実現、ということを狙って懸命な努力を始めた、そのように思う。
- ・ その中身は、一言で言えば反官僚・反自民。要するに、官僚政治の打破と、いままで続いた惰性的な自民党政治の一新、そして、マニフェスト政治というかたちで、マニフェストで国民の皆さんに公約したことを実行していくという、新しいかたちの政治行動がここに出てきた。
- ・ 官僚政治の打破については、国家戦略会議や、行政刷新会議というものを中心に展開しようとしている。いままでの事務次官会議はやめて、政治家が直接乗り込んできて自分の政策を責任を持って展開する、その間に官僚の介在を認めない、という思い切った、すっきりした態度を表明されている。
- ・ 内政面の具体的な問題としては、1つには、八ツ場ダムの中止・廃止という問題がある。8割がた進んでいたものをやめるとするのは、かなりの決断であると思うが、地元では、八ツ場ダムを実行してくれという強い要望を持っている。それをどうふうに捌いていくか、これは内閣の政治力にもかかわるところである。
- ・ その他にも、子ども手当、ガソリン税廃止、CO2の2020年度目標で25%削減(90年比)など、かなり思い切った政策を打ち出している。こういった難問題を自ら引き受けてやるというところに、政治家らしい雄々しさが認められるが、問題は、いかにして国民を説得していくか、そのやり方、手続きにかかっている。揚言することは簡単だが、問題は、いかに民衆の心をつかんで賛成のほうに転ずるか、また、各地域の行政機関を納得させるか、そういう説得力にかかっている。それこそ政治力であると見て、我々は重大な関心を持っている。

- ・ CO2の2020年度目標25%削減については、非常に思い切った政策で、国際的にもかなり評価を受け、日本の名声を高めたとは思いますが、その結果を列国側は注視している。日本の政治の信用にかかわることでもあって、日本の代表がこのように発言している以上は成功させねばならず、みんなができるだけの努力をしあうことが望ましい国民的態度であろう。
- ・ 一方、内需振興に対する政策がまだ明確には出てきていない。これをいかに的確に行うかに、内政上の手腕、力量が問われている。
- ・ 外交面については、アジア共同体の建設ということをしているが、その内容についてはまだ全然わからない。その内容、アジア共同体ということで、日本はアジアで何をしようとしているのか、いったいどこまでやろうとしているのかを明確にしていくことが、日本国民、アジア諸国、世界各国に対して非常に重大な仕事である。
- ・ 私が鳩山政権にやってほしいと思うことは、1つは日本の国家像をどういうふうに考えているか、それを明確にしておくこと。日本の国家というのはどういう国家で、外交関係その他はどういうふうに展開されるものであるか、という意味において、日本の国家像を示す必要がある。情勢によっては日本の未来の国家像も非常に重要。いい換えれば憲法改正にかかわるようなことまで考えてこれらの政策が展開されなければならない。
- ・ そのなかには、集団的自衛権の問題をどうするかというものとも絡んでくる。集団的自衛権というものをこの政策のなかでどういうふうに取り扱われているのかと、国際関係も明確にする必要がある。
- ・ 日本の国家像を展開していくうえでは、日本の教育体系をどういうふうにしていくかについても考えていく必要がある。国家像とは、1人の人が言うだけのことでなくて、日本として受け継いでやっていかなければならない国際責任を持っている要素もある。そういう面から見れば、国民あるいはそのほかに対するPR、特に教育的観点からの諸準備が必要。
- ・ 55年体制の思い切った転換という歴史的転換を行う以上は、大事なことは、国民に対して中身を完全に理解してもらって国民的支持を得るということであり、このための苦心惨憺の努力が行われる必要がある。

- ・ 官僚制度をどういうふうにして活用していくか、これが不可欠のポイント。官僚制度を打破するという事は正しいことではあるが、官僚制度というのは、ある意味においてはアイディアの倉庫でもあり、これらのアイディアをうまく活用し、また、アイディアをつくらせることが、政治家の仕事。官僚を味方にして、思う存分うまく使いこなすところに政治家の腕前がある。
- ・ もう一つ大事なものは近隣外交。これだけの国際的に大きな揚言をする場合には、事前に、あるいは直後に、その内容について各国の理解を得る努力が必須。韓国や中国やアセアンその他の近隣各国との間に十分な理解を得るような外交的努力が即座に行われなければならない、そうした手続きが非常に重要である。

< 質疑応答 >

- Q : 1980年代後半以降の世代は、ものごころついた頃から、比較的暗いニュースであるとか、日本は停滞しているという話を聞かされて育ったように思われる。同世代の人と話していても、日本がよくなっていくということに関するビジョンが持てない。あるいは、そういうものに対する実感がわからない、という状況があるように思う。日本人を育てるという点においてこれからどうあるべきなのか、中曾根先生のご意見をお伺いしたい。
- A : まだ国家像がわいてこないというのには、まだ人生経験が不足しているからだろうと思われる。できるだけ早い機会に外国へ行ってみられること、日本の先輩の書いたいろいろなものを読んでみることをお勧めします。
- 先輩もはじめから国家像を持っていたわけではない。成長するにつれて、だんだん濃度が濃くなっていくというもの。国家像がないといっても、実際は頭のなかにはあって、ただ、表現できないだけの話です。いま十分でないといって悲観する必要はなく、そういう気持ちを持って勉強し、ひとの意見を聞き、本を読めば、だんだん、体のなかに入ってくると思います。
- Q : これからの日本を担っていく世代である私たちには危機意識が希薄であるように思う。私たちがこれから意識すべきことや、描くべき国家ビジョンなどがありましたらお教えいただきたい。
- A : 自分にはないと自覚することが、一番尊いこと。朝から晩まで、寝ても覚めても自分でそれを欲して、なんとか自分の身につけたいという意欲をもって24時間を過ごし、様々な経験を積み重ねていくことで段々体のなかにしみ込んでくるものでしょう。

Q : 「民意」、といったものに対して、政治家の先生方はどういうふうにお考えになられ、やっていくのが正しいのか。それが衆愚性に陥らないようにするにはどうしたらいいか。例えば、消費税の導入等、国民のために、ある面では国民に対して苦いことも言わなくてはいけないのだろうけれども、それを言わない状態でいいのだろうか、ということについて、ぜひ先生のご意見をお聞きしたい。

A : 政治的な1つの目標については、それを実現させることが目的であるから、実現させるためにはどうすればよいかを戦略的に考えていくことが大切。

Q : 東アジアとの連携を深める際に、気をつけねばならないポイントがあれば、ぜひ一言ご示唆いただきたい。

A : 一番基本にあるのは、韓国、中国、日本の3国関係がまずしっかりしていること。さらにアセアン諸国との関係。ヨーロッパと比べると、文化や言語、地理的位置の関係で東アジア共同体というのはなかなかできにくい条件下にあるが、トップ会談などの対話を何回も繰り返し、関係を近づけていく努力が必要。それが東アジアの発言権を世界にも広め、東アジアの国民の幸せを増やしていくという基本になるので、そういう長期計画をもって日本の政治家がまず臨み、韓国や中国、アセアンの皆さんにもご理解をいただいて、協力作業に入れるように日本としては努力する。時間はずいぶんかかるかもしれないが、倦まずたゆまずこれをやる。そういうことが政治家として非常に大事。

< ゲストスピーチ（御厨貴東京大学先端科学技術研究センター教授） >

- ・ 中曾根さんのお話のキーワードは「時間」ということであったかと思う。説得をするために時間をかける。しかし、時を移さずして交渉を始めなければならない。つまり、政治というのは時間軸というものを立体的にとらえてやっていかなければいけない。最近の日本の政治というのはすべて先送りにしてしまっている。これは中曾根さんが政権をとっていたころを考えると、日本の政治がきわめて劣化してきたのだなとつくづく感じる次第である。
- ・ 今回の政権交代をどういうふうに見るかということ、簡単にお話をさせていただきたい
- ・ 鳩山政権発足以来、自民党政権であったらやめるという発想すら出なかったものを、とりあえずやめてみる、ノーを叩きつけている、という状態。これが、非常に躍動感につながっている。
- ・ 「やめて改革、やめて改革」といっていくうちに、やがて何カ月か経つと、いわゆる、改革疲れ、の状態になる。やめていったい何をしているのか、よくよく考えてみたらやめただけじゃないのか、ということになるかどうか、ここがポイント。民主党政権は、高い支持率を得てスタートしただけにかえって、少なくとも年内に、これというプラスの効果が出ない限り、支持は急速に失われていくだろう。
- ・ 今回、新政権スタート以降非常にはっきりしているのは、可視化されて出てくる大臣と、前評判は高かったのに絵になって出てこない大臣とが、分かれていること。可視化されて出てきた大臣というのは、少なくとも、何かの決断をし、あるいは、何かの決断について合意を調達しようとしている。
- ・ 民主党は、官僚に対して、この省・官庁がいまの日本にとって必要であるかどうかという選別化、差別化を始めている。官僚の側では、民主党の政治の配置図のなかに自分たちの省・政策をどのように乗っけていくかというところが、これからのポイントであろう。それがうまくいけば3カ月たったときに民主党政権はもっと政策オリエンテッドでやっていけるようになると思いますし、その辺がどうかというのは非常に注目に値するところだろうと思います。

- ・ 小沢一郎という政治家について、民主党が野党時代には、様々な話があったが、政権与党の幹事長となったからには、彼を判断するには、国民にむけての説明力があるかどうかだけが唯一の判断基準であって、国民に対してプラスになっているのか、マイナスになっているのかを見ていけばよい。
- ・ 小沢一郎氏を見ていくうえでのもう一つのポイントは、彼が持つデモニッシュな部分をどう考えるかということ。今は少なくなったが、官僚でも知識人でもなく、政治家である以上、そういった不思議なものを持っていることは事実であり、それをどう見るかがポイント。

< 事務局報告 >

次回開催予定:

第 13 回「日本創生委員会」

- 平成21年11月5日(木) 11:30~13:30 開催予定
- 会場 : 東京會館
- 講師 : 藤井裕久財務大臣、赤松広隆農林水産大臣(予定)